

## 十二光仏の研究

小 田 恭 寿

山崎弁榮上人の十二光の研究によつて私の学び得たことは、名号そのものもつ功德に哲學的組織、学的な組織を与えることによつて科學的に仏の光明を分析理解せしめたことである。それはあたかも分光器（フリズム）によつて白色（無色）の太陽光線が七色に變る如く、名号そのものの、功德は万徳であり、それを稱するものには名号の功德は余すなく及ぼすものであるが、名号そのものの内容の理解なくしては念仏することの出来ない五濁の中に身を置く我々であつて見れば、名号の中にこもる万徳をある程度智識の対象にのぼせてこれを分析理解せねば稱名の行そのものが継続されなくなるのではないか、否継続どころか念仏しようとする意志すら持たなくなつてゐるのではないか。弁榮上人の十二光はかかる時に時代の要求に従つて出現したものである。大乘

經典そのものの成立からして、衆生に利益を施す爲の善方便として、經典の意味を現在人に理解やすからしめる方法として、上人の十二光は最適のものと言わねばならないであらう。法然上人は選択集に名号そのものに対する見解を聖意はかりがたし、たやすく解すことは出来ない云々と、本願章の中に名号はこれ万徳の歸するところであると云つておられる。名号は万徳の所歸であるが、弁榮者はこの万徳を十二光で分析理解したのである。されば十二光であつてもまたは十三光であつてもよいわけであるが、無量壽經の教解にもとづいて十二光としたものである。そもそも浄土教そのものは声の宗教であつて、名号（南無阿彌陀仏）の仏号を通じて仏の慈悲が衆生の上に顯れ出て来るのであつて、この名号自体我々の上に顯出することなくしては、浄土教の生命は存続出来ないのである。時としてはこの名号は三昧の手段として理解されることもあらうし又は、往生の序の手段と理解されることもあらうが、とにかく浄土教に於ては稱名行が存続出来ると云うことではなくてはならない。稱名出来るか

否かそれが存続出来るか否かと云うことを考える時に、その存続の中心になるものは自らの生きた生命である。

この生命の生きた反応のない念仏は存続することの出来ない念仏である。念仏そのものは仏の慈悲の顕出であるはずなのだが、我々はややもすればこの顕出の道をふさいでしまふのである。

古来の先徳は、あらゆる努力を払つてこの顕出の道を整然たらしめたのである。遠くは、印度の竜樹、又は世親、中国の曇鸞、善導であり又我国の法然上人であり、近くは山崎弁栄上人である。私は山崎弁栄上人の十二光体系の理解を山本空外博士の著書「弁栄聖者の人格と宗教」を指南書として眺めたのであるが、そこに示されているものは、名号の功德性の分析理解であつた。如何にすれば名号を称えることが出来るか、継続することが出来るか、法然の選択集に示される供敬修、無余修、無間修、長時修が我々の上に果されてゆくかと言う、先達の苦闘努力の跡を知ることが出来たのである。

弁栄上人の十二光体系を哲学的に理解すると言うこと

は、それが私の上に如何なる実践行としてあらわれ出てくるかと言うことであつた。十二光を色々に分析理解して名号の持つ論理性の理解の度は高まつたが、しかし一面私は、その十二光体系の不消化から来る実践の迫力の欠如を如何ともすることが出来ないのである。それはあたかも大聖釈尊を亡した時の仏弟子が、其処に釈尊の残された教法があるにもかかわらず実践の意欲を失つてしまつた如く、又法然上人という偉大な人格によつて、教学の理解を越えて理解された実践の上から来る念仏のよるこびに恩師法然の恩籠にむせび泣いた弟子達になして、私には偉大なる人格者としての弁栄上人に接する機会を持ち得ぬという欠陥があつた。その為か私は残された遺著を通じて弁栄教学を充分と理解出来ない一様の寂しさがある。法然上人はただ念仏して往生すると申された。上人の逆修説法には、十二光のことがいささか触れられてあるが、その要を尽してないのは何故であろうか。人間の持つ理性の悲しさは自らを馳つて、疑問の世界へ疑問の世界へと追込んでゆく。法然上人は、往生の為には

学問はいらぬものと申された。しかし往生の為に学問はいらぬものとわかつたのは学問のお蔭だと言っている。こゝに至ると、名号の功德の分析理解は一応意義がなくなるものではないか。さもあれ法然上人の法語に、本願の意趣を知る程の学問は必要だと申されているからその本願の意趣の根本的理解がこの十二光によつて余すなく理解されるとすれば弁榮上人の功績又大なると云えないだろうか。かゝる観点から十二光と言うものに接して来た私は、一面法然上人の偉大さを単調な「ただ往生の為に南無阿弥陀仏と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて念仏することだと言う文章の特に力強さを知ると共に、本願の意趣の現在の把握を、まがりなりに弁榮上人の十二光体系によつて知ることが出来たのはまことに幸せなことに云わなければなるまい。

## 法然上人の教学の研究

—特に浄土観について—

### 片山法道

三〇年前岡山県の山峽に生まれた法然は、家庭的不幸のため、比叡山に登り仏教を学び、広く各地に道を求められたのである。当時の叡山の教学は法然にとつてはあまりにも了解しにくかつた。法然は善導の釈義によつて、より簡明で最も重要である凡夫得脱の新仏教をこゝに提唱したのである。

十八才の時黒谷叡空上人の許に投じ目的に向つて奮励されること二十有五年、遂に簡明なる万機得脱の要路を確認せられ、浄土一宗の確立を見たのである。

その浄土観に於いても生仏不二の立場を排除して、生仏分離の立場を取られたのである。当時は聖道門の教は唯心の浄土、己身の弥陀であつて、浄土といつてもそれは唯心の所現此土に於いて浄土を現じ、娑婆即寫光土となるという考えが基本的に存在していた。したがつて、この現実世界を離れてどこか別の所に浄土を立てるといふ考えは聖道門の教として取らなかつた。これに對し上人は「娑婆のほかに極楽あり、我身の他に阿弥陀仏います」と説いていられる。

浄土宗は法然上人の創立するところである。今から八